

本多重次取手に眠る

おせん泣かすな馬肥やせ

語呂のいい文面である。それもそのはず五七五、つまり俳句ではないか。季語はと問われれば「馬肥ゆる」となる。

しかし、俳句説は見当違いである。作者と目されるのは、本多作左衛門重次、家康の命を救ったこともある勇猛果敢な武将で、鬼作左と呼ばれていたという。天正十四年（一五八六）から五年間、岡崎城の城代を務めている。

その重次が天正三年の長篠の合戦で、陣中から妻宛てに書いたのが簡潔明瞭な「一筆啓上 火の用心 おせん泣かすな 馬肥やせ」である。すべてを焼き尽くす火事は恐ろしい、長男の仙千代をちゃんと育てよ、馬は補充できるように養っておけ。

関が原の合戦（一六〇〇）に勝ち、天下人になった家康は、作左衛門の功に報い、仙千代こと本多成重を越前丸岡城主にしている。

根拠の薄い一筆啓上

この「おせん泣かすな」の出典はないようである。重次が書き、妻に送った根拠もない。江戸幕府編纂の大名・旗本系譜集にも記載がなく、享保元年（一七一六）の「岩淵夜話」という本に「一筆申す 火の用心 おせん痩さすな 馬肥やせ かしく」とある。重次没して百二十年後である。

歴史の中に証拠はなくとも、調子のよい言葉だけが生きている。調子秀吉の勘氣に触れた重次を家康がかばい、上総国古井戸に閑居させた。のち下房国相馬郡井野（取手市井野）に移り、慶長元年（一五九六）に68歳で世を去った。



おせんの碑は、取手市青柳の本願寺に有志が建てた。本多家の菩提寺で、成重が丸岡藩主になってから三代後の重益のとき、丸岡藩は取り潰しになったが、やがて許され、取手・藤代で二千石の旗本となり、明治維新を迎えている。右下の写真は重次の墓。市内台宿の、井野団地を見下ろす高台に、ぽつんと重次の墓だけがある。